

「お母さんに抱っこしてもらったら泣きやんだね」。生後4日目の男児を抱く母親のケアに努める助産師＝姫路市下野1



# 広がる「産科混合病棟」

少子化の影響で、産科が婦人科や内科などの診療科と病棟を共有する「産科混合病棟」が全国で広がっている。出産数の減少で発生した空きベッドを病院側が埋めようとするためだ。お産や産後ケアを専門とする助産師が、産婦と他科の患者を同時に受け持つケースも急増しており、出産環境の質の低下や院内感染の危険性を懸念する声が上がっている。

(目原加奈)

## 少子化で空きベッドに一般患者

## 助産師が産婦以外にも同時に看護

「食事や排せつの介助が必要な患者の世話が増えている。終末期の患者の看護もあり、常に優先順位をつけて動かないといけない」姫路赤十字病院(姫路市)にある産科混合病棟の助産師2人が、病棟の厳しい現状を訴えた。

### 神戸のシンポで実態報告

さまざまな患者が入院する。産婦を待たせしてしまうこともあるという、助産師は「プロとしてもっと丁寧なお産に携わりたい」と本音を語る。

◇

◇

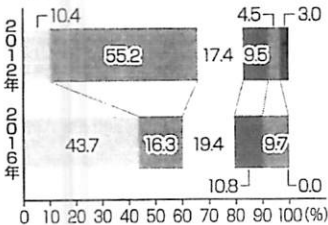
2016年に日本看護協会(東京都)が全国のお産を取り扱う526施設について行った調査によると、産科のみの病棟は全体の22・5%にとどまる。一方で、約3割が婦人科との混合で、婦人科以外の診療科との混合病棟は約半数に上った。

また、助産師の患者の受け持ち方については、43・7%の施設で「他科患者と産婦を同時に受け持つ」と回答。10・4%だった12年

### 産科混合病棟での助産師の患者の受け持ち方

(日本看護協会調べ)

- 他科患者と産婦を同時に受け持つ
- 常に他科患者は受け持たない
- 分娩介助時のみ他科患者は受け持たない
- 分娩第1期の産婦が入院した時点で、他科患者は受け持たない
- 無回答
- その他



## 人手不足、院内感染の危険性指摘



産科混合病棟の課題について、多角的に共有したシンポジウム＝神戸市中央区港島中町6

戸大大学院保健学研究所の齋藤いずみ教授(58)はそうした背景を説明する。

産科における助産師の配置人数について、日本では特に法的な基準はなく、病棟では、助産師も看護師も同じ看護職員として、7人の患者に対し1人の割合で配置される。ただ、産科混合病棟では「患者の死」と出産の看護が重なるケースもあり、現場では明らかに人手不足になっている」と齋藤教授。大阪急性期・総合医療センターの小児科医からは、他科の成人患者からの院内感染の危険性が高まる懸念も報告された。

母親の立場から、「日本妊産婦支援協議会りんの木」代表の古宇田千恵さん

最後に「マンツーマンで助産師が産婦につける雰囲気、現場からつくってきたい。ケアの大切さについて、私たち助産師が声を上げよう」と姫路赤十字病院の太田加代看護部長(53)が参加者に呼び掛け、締めくくった。



◇子育て面は日曜掲載です。